

疾風怒濤の若武者

「こんな麻雀初めて見た!!」

「最強戦」というのは麻雀界では特別のタイトル戦だった。予選4回、決勝2回、1日で消化してしまう短期戦でありながら、マスコミの報道も格別だった。出場者たちにとっても、この大会で勝つことはとても価値あることだった。

なんといっても、現在の麻雀界のスターが勢ぞろいしているのだ。実力も、そしてスターとしての華やかさも持ち備えた打ち手たちが一堂に会するのだ。

そんな中、ただひとり耳にない名前があった。佐々木秀樹、弱冠20歳の若者だった。彼は第4期雀鬼会Aリーグ戦の優勝者であった。雀鬼会のことなら皆知っていた。すでに引退しているが、麻雀界ではその名を知らぬ者はいない、桜井章一の主宰する団体だ。

佐々木：？ 誰だそれは？ ああ桜井さんのところの若手が。桜井さんは凄い。凄い。彼が桜井さんではない。それに20歳の若者では、この並いる百戦連磨の強者たちの中では無理だ。まあ8位以内に入れば上出来さと、口さがないギャラリの何人かがさやいていた。

1・2回戦と佐々木は2着・2着。どう

ということとはなかった。ところが3回戦、彼は猛烈な勢いで和了り始めた。国士無双のおまけまでつけて、102Pのダンツツ。皆、ようやく彼に注目し始めた。

3回戦終了時点、当確は佐々木と安藤。残るひとつの席は山崎、灘、それに井出、天野、長谷川が圏内だった。特に灘と山崎は4回戦目、同卓。どちらかがトップをとれば決勝進出間違いなし。どちらかトップをとれなければ、井出、天野、長谷川の誰かが決勝進出の切符を手にする。

山崎と灘はオーラスまで1着と2着の一進一退の攻防をくり広げていた。結局、オーラス2本場、灘のピンフのみでけりがついた。その差2300点。山崎、あと一歩およばなかった。めずらしく山崎は悔しさを顔に出していた。

一方、佐々木は4回戦ラス前まで、10000点を割るダンラス。決勝進出の切符が御破算か、と思われた。攻撃を信条とする佐々木の麻雀がここにきて、若さと、ビッグタイトル戦初出場のプレッシャーで崩れかけた、かに見えた。せつかくダンツツで迎えた4回戦目、無理に攻めに出なくとも、2着か3着で無難にまともにおけいのに、と誰もが思った。否、ただふたりを除いて。佐々木本人はもちろんそう思っていなかった。そして桜井も。

ところが、このラス前と、オーラスの佐々木の親番で猛ラッシュがかかった。終わってみればトップに躍り出ていた。合計171・5Pのダンツツの成績で決勝進出となった。

第4回麻雀史上最強戦

主催 株式会社 竹書房 近代麻雀オリジナル 近未来 別冊近代麻雀

決勝の卓では伊藤が待っていた。安藤、灘、そして佐々木が決勝戦の顔ぶれとなった。この時点で佐々木はまだ、ワンランク下に見られていた。相手は伊藤、安藤、灘である。佐々木はまだ麻雀を本格的に始めて3年足らず。なんといっても20歳だった。

決勝1回戦、トップは安藤。さすがに安定した重厚な麻雀だった。数多くの修羅場をくぐってきた者だけの持つ切れ味の鋭い打ち筋だった。佐々木は2着。3着は灘、4着は伊藤だった。

4回行なわれた最強戦で、予選から勝ち進んで決勝の卓に3度着いたのは安藤だけだった。これは計り知れない実力である。そしてついに念願の最強位につくまであと一歩のところまで来た。

しかし、すぐ後ろに佐々木がいた。2回戦、東3局、ドスン!! といった感じの大手手が出た。

この手をリーチしてツモリ和了った。ウラドラが4で倍マン。佐々木だった。

この前局に、実は伏線があった。東2局、伊藤の

のリーチに対して一歩も引かず、佐々木は

